

## 世界遺産国内候補、九州・山口から3年連続 福岡

脈々と継承されてきた「神宿る島」の伝統が評価された。「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録推薦が決まった28日、地元からは喜びの声が上がった。「明治日本の産業革命遺産」「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」に続き、3年連続で国内候補が九州・山口から出たことになる。

「神話の時代から続く歴史ある宗像が世界遺産の日本代表に選ばれたことは、とても嬉しい。今後は国際的に、その存在を訴えてゆきたい」

宗像大社は同日、ホームページで葦津（あしづ）敬之宮司の名前でコメントを発表した。

国内候補選抜には、地元の盛り上がりも一役買った。

「宗像を世界遺産に」という吉村作治・早大名誉教授の声かけに、宗像大社の氏子、吉武邦彦県議（59）は突き動かされた。吉武氏は平成14年ごろ、有志と「沖ノ島物語実行委員会」を設立し、登録運動を始めた。

20～40代が中心で、宗像大社で埋蔵品を公開する「大国宝展」を成功させるなど、街ぐるみで機運を高めてきた。吉武氏は「宗像の子供たちが誇れる故郷を作ろうと、世界遺産を目指してきた。うれしい」と語った。

この盛り上がりを生かそうと、宗像市の郷土文化学習交流館「海の道 むなかた館」は29日、遺産群の「沖津宮（おきつぐう）」「中津宮」「辺津宮（へつぐう）」の3つの宮の写真展を始める。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」は、日本古来の信仰のあり方と文化的伝統を今に継承する点が評価された。

一方、その宗教的性格から「（沖ノ島からは）一草一木たりとも持ち帰ってはならない」「島で見聞きしたことは他言してはならない」などの掟がある。

福津市の小山達生市長は「私は漁師の家に生まれたが、沖ノ島でのことは家以外では絶対に話してはいけない、と教育を受けてきた。国内代表として推薦をいただけるのは心から感謝したいが、21世紀になり、（こうして）いろいろな人の目に触れることになるのは、意外なことだと思った」と感想を述べた。